The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヴィトゲンシュタインとオースティン : 語の意味論と文の意味論
Author(s)	野村, 恵造
Citation	Osaka Literary Review. 1984, 23, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25602
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヴィトゲンシュタインとオースティン

——語の意味論と文の意味論——

野　村　恵　造

1．Loquor, ergo sum.[1] ことばは，人間存在にとって本質的である。言語が人間の認識・思考に関与する仕方は，それが言語学の研究対象になるずっと前から，哲学において問題とされて来た。ある時代には，それは思索ないし哲学活動が道具としてのコトバに依存せずには行なえない，というほぼ自明な自覚としてであった。別の時代には，哲学の目標である諸概念の解明は，言語の構造の説明を通じて行なわれる，あるいは言語の解明そのものがとりもなおさず哲学することになる，と主張する立場に典型的に見られるように，コトバがより直接的に哲学の主題となった。

極めて大雑把に言って，（西洋）哲学の中心課題が自然や神から人間に遷ったのが近代・現代であるとすると——この種の一般化が有効であれば——その移行に伴って，人間中心の，あるいは，いわば人間に相対的な哲学が志向されるのは当然の成り行きであった。その際に，コトバが，人間存在そのものと不可分であるという見方が正しいとされる限りにおいて，哲学の主役を演じることも正当化されて来た。例えば，この（論理的）世界は，人間から独立して絶対的に存在するのではなく，人間の思考，即ち言語という体系の内側で整合性が保たれているのであるし，また，それらが世界の限界をも決定している——といったふうに。

こういう文脈，つまり，コトバの分析を通じて哲学するという手法，さらに加えて，（文化的・社会的諸活動を行なう存在，生の一連の臨場感あふれる場面に文字通り手に汗握って参加していく存在，としての）人間に対する関心，という文脈において思い出される現代哲学者は，例えば，L.ヴィトゲンシュタインとJ. L.オースティンであろう。

2．さて，今世紀前半に，同じく言語分析を武器にする反形而上学である〈分析哲学〉に分類されながら，いわゆる〈論理実証主義〉とは異なる方針あるいは姿勢を持つ一群の哲学者が英国を中心に存在し，一般に〈日常言語学派〉と呼ばれている。しかし，前者程には学派としての実質は明確ではないし，また言語批判に対する基本的な考え方も，決して統一的綱領に基づくといった種類のものではなかった。

その中で，相前後して，それぞれケンブリッジとオクスフォードにいた，オーストリア生まれのヴィトゲンシュタインの“後期”の思想と，ランカスター出身のオースティンの仕事は，同学派の代表と考えられている。本論では，この二人の哲学者の関係を考えてみようと思う。

両者共，それぞれ強烈な個性を持ち――ユダヤ系の思想家は，その自ら哲学を生きる異常さの為に，またイギリス人の哲学者は，思索を楽しむ英国的正常さの故に――人々を魅了した。この観点から興味深い評伝が出来上がるはずであるが，本論はその立場にない。[2] また，両者の間の直接の影響関係については，一方のヴィトゲンシュタインは「オクスフォードの哲学界を『インフルエンザ汚染地帯』とののしった」[3] といい，また，その性格から考えてもオースティンから影響をうけたとは考えにくい。他方，オクスフォードの定例の研究会ではヴィトゲンシュタインの著作も使用されたようであるが，オースティンのそれに対する少しばかりの批判的評言が残されているだけである。[4] 結局，両者の間には「その思想形成上でまったく何らの交流もなかった」[5] と考えられ，もし何か関連があったとしても「たんに外的なものに過ぎない」[6] ようである。さらに，このような小論では両者の哲学自体の細部を比較検討する余裕もない。[7]

そこで本論では，まず極めて概略的に彼らの哲学――特に言語分析に関して――を対照し，その後，彼ら以降の言語に関する研究（言語哲学・言語学）において一般に彼らにそれぞれ帰されている理論に注目し，そのうちのある限定的な場合を比べて，二人の理論の一部がいかに関係づけられるか，考えてみることにする。両者の言語研究に対するインパクトの大き

さを思うと，この種の限定的な比較にも，いくらかの意義があろう。また，本論の直接の目的ではないが，狭義の，即ち論理的な〈意味論〉と，言語使用者や場面を考慮に入れる〈言語実用論〉（以下，語用論）の区別立てに資するところがあるかも知れない。

3．ヴィトゲンシュタインは，生涯の前半と後半でそれぞれ異質と見える言語理論を提出した。その“前期哲学”においては，まず，世界を構成する基本的要素として〈対象〉と〈事態〉の二つの単位を認めた存在論に基づく体系をたてた。そして言語の有意味性を，それが〈世界を写す像〉であることに求めた。つまり言語は，実在に繋ぎ留められることによってはじめて意味を持つ，というわけである。また，実在に対応して像の側，即ち言語の側にも〈名辞〉と〈命題〉という二つの基本的な表現単位，及び〈実在と像の間の論理形式の共通性〉を与えた。さらに，哲学は静的な体系ではなく活動である，とした。彼のいう活動は，理想言語だけで世界を限界づけ，擬似的な命題や混乱した名辞に満ちている日常言語を――従来のすべての哲学的問題も一緒に(!)――矯正するという“言語批判”がその実体である。そして極めて禁欲的にメタ言語を拒絶し，最終的には読者に（世界やコトバそのもの等）他のものについて語った「自分の書物を乗り越える」[8] ことを要求し，見透しのよい高所まで読者を導いた「梯子」[9] を投げ捨ててしまう。

しかし，捕捉可能に見える基本的な統一形式のみをとらえて，それで済ませてしまうには（日常）言語は豊か過ぎる。実際，彼は名の担い手と名の意味は同じではないことを知り，事実の記述は言語の多様な機能の一つでしかないことに気づく。そして，言語の機能は，実際の生活の場面での使用によって把握されるべきである，と考えるようになった。これが彼の“後期哲学”への転換である。

懺悔したヴィトゲンシュタインは，ゲームにおける諸要素を例にひきながら「言葉の意味は（言語ゲームにおける）〈使用〉である」と定義する。

また，言語の機能は多種多様であって，その間には〈家族的類似性〉があるのみで統一的形式に還元し尽くし得ない。今度は，言葉のやりとりを織り込んだ人間の活動全体が問題となるに至ったのである。

急いで付け加えると，しかしながら後期においても前期と同様の問題意識があって，例えば，哲学に対する姿勢や哲学の目的に関する考え方，また，ここでの脈絡ではより重要なこととして，言語（の意味）への強い関心——前・後期で把握の仕方に一見，劇的な違いがあるにしても——は，そのままであったし，さらに後期の言語論は前期のそれを内に含むと考えられる可能性も，諸家が指摘するところである。

4．一方のオースティンについては，哲学史の中で多くは語られて来なかった。これは，ひとつには，彼が体系的な哲学・哲学書を残さなかったことによるのかも知れない。あるいは，ヴィトゲンシュタインの関心が，言語を通してではあるが，究極的には伝統的哲学の中心課題に向けられていたと考えられるのに比して，彼は，職人的端正さがあり，また同時に斬新でもあったその手法には一定の評価が与えられながらも，上述の様にコトバに対する関心が高い時代にあっても，やはり主流ではあり得ない為であろうか。あるいは「哲学は言語批判である」という時の〈哲学〉と〈言語〉の関係のあり方を考えるよりもむしろ言語の分析そのものに忙しく，それが同時に哲学をすることになっているはずだ，という思い込みがあったのか。あるいは，日常言語学派全般にあてはまるかも知れないが，彼の方法は，哲学を専攻する者に授けるのに相応しい知的訓練であって，それ以上のものではない，また，彼の残したものはある種の語彙目録でしかない——という類の批判に少しでも正当化の根拠を与える要素があったからなのであろうか。

さて，彼が主宰した研究会では，知覚・アプリオリな真理・反事実言明・アイデンティティと他者の心等が中心テーマとなったが，[10] そこではオースティンは常に単純な二分法を嫌い，A．J．エイヤー達の実証主義・還

元主義と対立したということである。[11)]

ところで，オースティンの哲学の中で今日まで最も強く影響が及んでいるのは,〈言語行為〉に関する仕事である。彼は，実際に発話された文には事実の陳述をするものばかりではなく，その発話自身が行為の遂行になっているケースがあることにまず着目し，それらについては真偽を賓述するのはあたらないとする。さらに発話による言語行為の成り立ちを〈発語行為（これ自体，音声行為・用語行為・意味行為から成る)・発語内行為・発語媒介行為〉の合成として説明する。そして，最終的には事実の“陳述”はそれ自身がひとつの〈発語内行為〉であるとして，冒頭の「陳述か否か」という二分法を例によって破棄する方向に進む。

5．以上，ヴィトゲンシュタインとオースティンの哲学を極めて簡単にスケッチした。言語哲学ないしは言語学における両者の後世への影響という観点からふり返ると浮び上がってくるのは,「語の意味は使用である」と喝破した時のヴィトゲンシュタイン（後期）であり,「ある文を発話することが実際には何をしていることになるのか」を問う場合のオースティンである。即ち〈意味＝使用〉論者のヴィトゲンシュタインと言語行為論提唱者としてのオースティンである。

そこで以下では，両者に源を発すると一般に考えられているこれらの言語理論の関係づけを考えるのだが，ただし，彼ら自身が正確にどういう言い方をしたのかを問題にするというよりはむしろ，対照をはっきりさせるために，それぞれによって言語哲学・言語学に遺産として残され，継承されていった形で――しかも限定的で極端な説を想定して――比較することにする。

6．「意味とは何か」つまり〈意味の意味〉を探求する過程で，これまでに種々の提案がなされて来た。即物的なもの，心理的な見方，操作的なアプローチ等。[12)] また，意味の一部を問うもの，一部の意味を問うもの。さら

に，意味の意味を直接問うことは避け，その代わりに「(ある言語表現の)意味を知っているとは」あるいは「それを（子供・外国人学習者に）教えるには」という問いに答えようとするもの，等々。

その中で，少なくともある時期には有望であるように思われ，また限定的な意味では，今なお有効な説として，一般に後期のヴィトゲンシュタインに帰されているのが〈意味はその使用(法)である〉という説である：

> For a *large* class of cases——though not for all —— in which we employ the word "meaning" it can be defined thus: the meaning of a word is its use in the language.[13]

これに類する〈意味〉の定義は多く見られるが,[14]「我々の"意味"に対する直観にあわない」,「狭過ぎて意味の全体をとらえていない」,あるいは逆に「漠然としすぎていて，事実上有効性を持たない」等の反論が考えられるし，また実際，批判もされて来た。

その結果,〈意味の意味〉論争に最終的な決着をつけることを一応棚上げし，J.S.ミル (Denotation / Connotation) あるいは現代ではフレーゲ（英訳 Reference / Sense)，カルナップ (Extension / Intension) 等に始まる二分法に従って,〈意味〉を，概念もしくは言語表現の〈外延的事物〉と，その〈内包的徴表もしくは属性〉の二つから成り立つとし，それで少なくとも重要な部分は捉えられたことにして，論理学ではどちらかというと外延に,また言語学では主に内包に,関心を向けながら研究を進めているのが現状ではないかと思われる。

7．さて，以上の研究史的文脈では,「語の意味はその使用である」というヴィトゲンシュタインの所説は，他の諸説と同列に，文字通り〈(文ではなく）語の意味〉についての定義であると解釈されるのが通例であった。

これは，ある意味では重大な誤解，もしくは少なくとも片手落ちである。というのは，ヴィトゲンシュタイン自身は，対象と事態を相互依存させ，換言すれば〈もの〉と〈こと〉を総合し，それに対応するものとしての名

辞と命題の機能を力説した前期哲学は当然のことながら，後期においても依然としてフレーゲの原理[15]を媒介に〈語（の連鎖）の，文というレベルでの使用〉を考えていたはずであるから。[16] しかし，ヴィトゲンシュタインのholismに関しては別の機会に譲ることにして，[17] あくまでも継承された遺産という視点から，ここでは〈使用に基づいた，語の意味に関する定義〉であったと限定的に解釈することにする。[18]

この解釈のもとでは，互いに錯綜する多種多様なヴィトゲンシュタイン的言語ゲームのそれぞれの内部で，参与者である言語発話者（以下，話者）が，何らかの意図を持って，語を使用する。それによって意味が生じる。〈語〉という基本的自立単位が，話者の“思い”を担って，人間の諸活動を構成する一場面で，実際の使用に供された時に，意味という生命が吹きこまれるというのである。言い換えれば，〈意味〉の本質的な最小単位は〈語〉であって，〈文〉は便宜上の纏まりに過ぎない。〈語〉と〈文〉には範疇の違いはなく，文全体の（使用による）意味は，その文の構成に貢献している語の（使用によって獲得された）意味の和として算定出来る――と主張していることになる。要するに，使用された語が文という集まりとなって場面の中で機能する構図が考えられている。

8．一方，オースティンの唱えた発話行為論は，一見〈述語動詞の意味〉に還元してしまい得るような例が数多く挙げられているにも拘わらず，本質的には発話された文全体の働きに関する包括的な〈文の意味論〉であった。

オースティン自身が最も強く主張したのは〈発語内行為〉[19]のレベルである。彼は「ある文の発話がその場面においてどういうつもりで為されているか」即ち〈発話の（真の）意図〉のうち，〈慣習性〉の規準で捉えられる範囲を（発語行為・発語媒介行為とそれぞれ区別されるものとして）〈発語内行為〉と呼び，その分析に腐心した。

以後の発話行為論の議論は，発語内行為のレベルの有用性，及び発語行

為と発語内行為の間・発語内行為と発語媒介行為の間のそれぞれの区別の有効性をめぐって展開した。

その詳細は省略せざるを得ないが，ただ本論との関連で注目したいのは，発語内行為を重視したオースティンの基本構想を推し進めたものとして，ある文の意味を，その文を用いて行なう発話行為（のうちの発語内行為）のみによって規定しようとする立場が生じてくる可能性である。

さらにこれを徹底すると（文という纏まりだけではなく）語の意味も，その語を用いて行なう——あるいは，その語が貢献する——発話行為（のうちの発語内行為）によって規定しようという発想が生まれ得る。つまり，文という纏まり全体の（使用による）意味を分解して，語の（使用による）意味を得ようというわけである。ここでも〈文〉と〈語〉は，大きさの違いであって質的な差異はないとみなされることになる。

例えば，Alston (1963, 64)[20] は，文の意味，さらには同じ論法で語の意味をも，その文の発語内行為[21] で規定しようと試みている。しかし，Holdcroft (1964)[22] が正しく指摘するように，Alston が目指したのは二つの表現（文・語）間の意味の同一性を発語内行為（への貢献）の同一性に置換することであったから，彼を発語内行為だけで言語表現（文・語）の意味そのものを決定しようとしている例とするのは適当でないかも知れない。

ところで，発話行為による語の意味の指定が実際の作業上如何なるプログラムで行なわれるかは暫く措くとして，今指摘したいのは，ヴィトゲンシュタイン的〈語の意味〉の定義とオースティン的〈文の意味〉の定義がここで交わり得るということである。即ち，ヴィトゲンシュタインに始まるとされる使用説の言う〈話者による場面での使用によってその意味が決定され，文という大きな単位に纏め上げられ，さらに人間の一つの“生態”形成に貢献するもの〉としての語は——〈社会的・慣習的な諸活動の核として，実際の場面での使用に供されるオースティン的発話文〉を，行為としての言語使用に留意しながら分解して得られる構成素としての語に，正に等しいのである。

9．前節では〈発語内行為のみによって文及び語の意味が規定出来る〉という極端な説を想定し，それを通じて，ヴィトゲンシュタイン的意味の定義とオースティン的意味の定義の一つの繋がり方を述べた。その際，その援用された説の有効性は問わなかったので，それをここで Holdcroft (1964)[22] ともに，簡単にみておく。

(1) a. I promise to help you.
　　b. I will help you.
(2) a. Can you reach the salt ?
　　b. Please pass the salt.
　　c. Can you reach the sugar ?
(3) a. It is raining.
　　b. It is snowing.[23]

(1) a の発話は顕現的に〈約束〉という発語内行為を行ない，(1) b も典型的に〈(同内容の) 約束〉行為を行なうのに使われる。この時，発語内行為によって文の意味（の同一性）を決定する説では，これらは同じ意味であると考える。同様に (2) a, b も〈依頼〉として機能している場合，同じ発語内行為を行なっているので同意とされる。しかし(2) c は明らかに(2) a, b とは同義とは思えないが，その直観を捉えるには「a, b は〈塩を取る依頼〉であるのに対して，c は〈砂糖を取る依頼〉である」の如く，より詳しく指定しなければならない。(そうして初めて，a と c が同じ発語内行為を遂行するために用いられないから「塩」と「砂糖」が別の意味である，と言える。) (3) の a, b も明らかに同意ではないから，〈(天候に関する) 言明〉では足りず，さらに詳しく，a は〈「雨が降っている」という言明〉, b は〈「雪が降っている」という言明〉と指定しなければならない。これは発語内行為のみで文の意味を決定しようと企てても，結局，表現（(2) a, c では「塩」と「砂糖」, (3) では「雨が降っている」・「雪が降っている」という文，あるいは少なくとも 'rain (雨が降る)' 'snow (雪が降る)' という動詞) の (狭義の) 意味論的意味についての知識が前提となっている――ということを意味する。

ここではこれ以上に根拠を挙げる余裕はないが，一般的に言って，行為としての言語使用にのみ依拠した意味理論は十全ではないと考えられる。(オースティン自身は,「語の意味は Sense プラス Reference である」と繰り返し述べていることを思い出すべきである。)

人間の言語記号による伝達は，場面において話者が意図を持ち，言語表現を使うことにより意味を伝える,ということがその実体であり，意味(生起）の根拠は，最終的にはこの言語行動に還元されなければならないのは当然である。しかし一方では，高度に制度化され慣習化された記号体系としての言語の狭義の(即ち，言語使用者を捨象した)意味論の研究が――言語が言語以外の一切から多少とも区別出来る限りにおいて――前提とされている。そして，それが，例えばBennett (1976)[24]に総合されているような，Lewis (1969)[25]的〈慣習的な共同関係〉に裏打ちされた Grice (1957, 68)[26] 流の〈各場面に於ける話者の意味（意図）から間主観的な固定した意味への変換〉のプログラムを通じて，人間の伝達行動に関係づけられて，ようやく全き意味理論の完成が期待出来るのである。

10．本論では，人間の人間的な存在はコトバに決定的に依存しているという認識のもとに，現代哲学の中で，コトバと人間の関係に重大な関心を抱き，哲学的に斬新な手法を示した二人の哲学者に注目した。言語分析の視点から，一方は〈語の意味論〉,他方は〈文の意味論〉を唱えたと解釈を限定した上で，言語哲学・言語学に残した遺産という形で捉えなおした時に，両者が如何に関係づけられるかを考えた。

しかし，その際に援用した立場の成立に否定的な見解を示し，〈語の(使用による）意味論〉と〈文の（使用による）意味論〉は，そのままでは結びつかないこと，話者は〈語〉を材料として使って文を組み立てるが，場面の中で真なる意味で〈使用〉されるのは〈文〉というレベルに於いてであること，を示唆した。さらに最後に（狭義の）意味論と語用論は，いずれか一方のみで〈意味〉を説明し尽くすことは出来ずに，互いに他を補い合うものである，という誠に穏健な立場を支持した。

残された課題としては，二人の哲学そのものを詳細に比較するのは，大きな，しかし必要な仕事であるし，他方，本論の範囲でも，さらに，例えば〈意図〉と〈慣習〉（固定化の性格と度合）に関して，両者がどんな見解を懐くかを考えてみるのも興味深いことであろう。[27)]

注

1）Lyons (1982) 'Deixis and Subjectivity' in Jarvella *et al.* (eds), *Speech, Place, and Action* (J. Wiley).
2）Cf. Berlin (1973) *Essays on J. L. Austin* (OUP), etc.
3）藤本隆志（1981）『ウィトゲンシュタイン』（講談社）p. 140.
4）Berlin, *Ibid,* p. 24.
5）オースティン（坂本百大訳）『言語と行為』（大修館）p. 333.
6）ヴフタール他（寺中平治訳）『ウィトゲンシュタイン入門』（大修館）p. 158.
7）Cf. Williams *et al.* (eds), *British Analytical Philosophy* (RKP), pp. 17-39.
8),9）ヴィトゲンシュタイン（藤本隆志他訳）『論理哲学論考』（法政大）p. 200.
10),11）Berlin, *Ibid.,* pp. 9-12.
12）Cf. 池上嘉彦『意味論』（大修館），國廣哲彌『意味論の方法』（同），廣松渉『もの・こと・ことば』（勁草書房）等。
13）Wittgenstein, *Philosophical Investigations* (Blackwell), § 43.
14）Cf. Parkinson (ed) (1968), *The Theory of Meaning* (OUP), p. 141.
15）概略〈複合表現の意味は，その諸部分の意味の関数である〉という原理。
16）Cf. Wittgenstein, *Ibid.,* § 49, etc.
17）Cf. Luckhardt, *Wittgenstein* (Cornell UP) pp. 213-242.
18）〈使用〉が語の，言語内部における使用規則なのか，広くそれ以外のものを含めた使用の総和をいうのか，もここでは不問。
19）各行為の名称は毛利可信『英語の語用論』（大修館）等を参照。
20）Alston (1963) 'Meaning and Use' in Parkinson (ed), *Ibid.,* 及び同 (1964) *Philosophy of Language* (Prentice).
21）彼は illocutionary-act potential と呼ぶ。
22）'Meaning and Illocutionary Acts' in Parkinson (ed) *Ibid.*
23）例文は，毛利，Alston, Holdcroft 各上掲書より。
24）J. F. Bennett, *Linguistic Behaviour* (CUP).
25）D. K. Lewis, *Convention* (Harvard).
26）'Meaning' *Philosophical Review* 66 (1957), 'Utterer's meaning, sentence-meaning, and word-meaning' *FL* 4 (1968).
27）スペースの都合で，注で言及した文献以外の参考書目は省略する。